

(3) 普及上の留意点

ア 栽培上の注意

- (ア) 多肥による草型の乱れは少なく初数の確保も容易であるが、登熟性、耐病性からみた耐肥性はフジミノリより劣るため穂首分化期の追肥をさけるとともに無理な多肥栽培は避けること。
- (イ) いもち耐病性はフジミノリより弱いので充分注意して適期防除につとめること。
- (ウ) イネカラバエ耐虫性は弱と判定されているので多発生地帯では防除について考慮すること。
- (エ) 耐冷性はレイメイ並みであるが穂ばらみ期の低温時には水管理に注意する。

イ 適応地帯と見込面積

- (ア) 北奥羽地帯、北部沿岸地帯の山間部、高冷地帯を除く平坦部（馬淵川、安比川流域の標高200m未満の平坦部では中苗機械移植栽培は可能であるが、その他の平坦部では成苗手植栽培とする。）
- (イ) 北上川上流、遠野地帯の山間高冷地帯を除く平坦部（標高200mまでは稚苗機械移植栽培も可能であるが200m以上では中苗機械移植並びに成苗手移植栽培とする。）
- (ウ) 奥羽山間地帯は山間高冷地帯を除く平坦部。
- (エ) 北上川中、下流、南部山間、南部沿岸地帯の県南部では平坦部を除く山間山麓地帯（標高150m～250mまでは稚苗機械移植栽培が可能）

ウ 普及見込面積 8,000～10,000ha

2 わせとらもち（もち）

系統名 青系糯73号

(1) 奨励品種に採用する理由

「わせとらもち」は、早生種で短稈・強稈の品種であり、播種後の発芽、苗立のよい品種である。本県の県北地方において、奨励品種のうち、糯品種は「タツミモチ」と「サカキモチ」である。

「タツミモチ」は、早生で耐冷性は強いものの、稈が弱く、特に、機械移植においては倒伏し、収量品質を低下させる危険性が高い。「サカキモチ」は「タツミモチ」よりもやや強稈ではあるが、長稈であるため、機械移植においては、常に倒伏の危険にさらされるとともに、熟期の点でも県北地方では機械移植は困難である。

また、「タツミモチ」は、発芽・苗立ともやや難がある品種である。

これ等の問題を解決するため「わせとらもち」を奨励品種として採用した。

(2) 来歴と特性の概要

ア 来歴 わせとらもちは昭和38年青森県農業試験場において青系もち8号（とらもち）×フジミノリを母とし、シモキタを父として交配を行い以来、選抜固定をはかり1971年（昭46）青系もち73号の系統名を付し、同年から地域適応性の検討をすすめた結果、1973年（昭48）

に青森県の奨励品種として採用され、わせとらもちと命名した。本県では1974年(昭49)に生産力検定調査にとりいれ1975年(昭50)からは現地調査に入れて検討を行った結果、有望と認められた。

イ 特性の概要 出穂、成熟期はタツミモチとサカキモチのほぼ中間で県北地方では早生種の晩に属する。短稈で稈が太く強稈偏穂重型品種、草姿はシモキタに類似し、タツミモチよりは多収で安定している。玄米はタツミモチより丸味をおび品質はタツミモチ並みである。耐冷性はシモキタ並みであり、いもち耐病性もシモキタ並みの強さをもっている。

第4表 特性調査表

(県北分場)

項目 品種名	稈の 細太	稈の 剛柔	芒の 多少	稈先色	稈色	脱粒 の難易	玄米の 形状	玄米の 粒大
わせとらもち	太	剛	極稀短	淡褐	黄白	難	丸	やや小
(標) タツミモチ	中	柔	〃	〃	〃	中	中	中
(比) サカキモチ	中~太	柔	無	〃	〃	難	〃	〃

第5表 生育調査、収量調査表

(県北分場)

試験別	品種・系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟時			玄米重 (kg/a)	同左 比率 (%)	玄米 千粒重 (g)	品質	検査 等級
				稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (m ²)					
生検	わせとらもち	8.9	9.23	78	17.3	426	60.0	105	21.6	中中~中上	—
成苗	(標) タツミモチ	8.9	9.22	86	17.3	428	57.4	100	21.9	中中~中上	—
標肥	(比) サカキモチ	8.13	9.27	85	18.2	394	60.4	105	21.8	中中~中上	—
生検	わせとらもち	8.17	10.10	75	16.6	502	56.1	109	20.4	中 下	—
成苗	(標) タツミモチ	8.14	10.7	81	18.0	507	51.4	100	21.0	中 中	—
多肥	(比) サカキモチ	8.19	達せず	82	18.1	465	41.3	80	21.2	中 下	—
生検	わせとらもち	8.20	達せず	82	17.4	538	44.3	123	19.5	中 下	—
稚苗	(標) タツミモチ	8.19	達せず	86	17.0	558	36.0	100	19.1	下 上	—
標肥	(比) サカキモチ	8.22	達せず	90	17.4	536	20.5	57	19.2	下 上	—

注) 生検成苗標肥は昭49~昭51年までの3ヶ年平均

生検成苗多肥、生検稚苗標肥等中区は昭和51年の成績

(本場)

試験別	品種・系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟時			玄米重 (kg/a)	同左 比率 (%)	玄米 千粒重 (g)	品質	検査 等級
				稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (m ²)					
生検	わせとらもち	8.7	9.23	68	16.9	361	53.4	103	21.9	中中-中下	3-3上
成苗	(標) タツミモチ	8.6	9.20	80	17.6	372	52.0	100	21.1	中中	3-3上
標肥	(比) サカキモチ	8.10	9.26	77	17.9	348	55.8	107	23.0	中中	3上-2
生検	わせとらもち	8.6	9.23	71	17.4	418	61.6	100	22.0	-	3-3中
成苗	(標) タツミモチ	8.6	9.21	82	18.5	432	61.6	100	21.2	-	3-3上
多肥	(比) サカキモチ	8.10	9.27	81	18.7	398	66.0	107	23.3	-	3-3上
生検	わせとらもち	8.14	10.5	66	16.5	381	46.2	97	20.8	-	4上
稚苗	(標) タツミモチ	8.13	10.3	78	16.7	421	47.8	100	22.1	-	3上
標肥	(比) サカキモチ	8.18	10.12	71	16.7	379	44.4	93	21.7	-	3上
生検	わせとらもち	8.16	10.11	68	16.0	394	56.5	99	21.9	-	3上
稚苗	(標) タツミモチ	8.13	10.5	79	16.8	450	57.0	100	21.9	-	3下
多肥	(比) サカキモチ	8.19	10.12	78	16.2	445	50.3	88	22.6	-	3上

注) 生検成苗標肥、多肥区は昭49~昭51 3ヶ年平均値

生検稚苗標肥、多肥区は昭51年1ヶ年の数値である。

ウ 栽培上の注意

- (ア) 倒伏抵抗性は強い方であるが坐折倒伏のおそれがあるので無理な多肥栽培はさけ、サカキモチ並みの施肥量とする。
- (イ) いもち耐病性はシモキタ並みなのでシモキタ並みの取扱いで防除すること。
- (ウ) 刈りおくれで着色粒が発生しやすく品質が低下するので適期刈りを行うこと。

エ 適応地帯と見込面積

県中部以北の平坦地、山間部、沿岸の早生種が作付されている地帯で普及見込面積は、400~500 ha。

3 大豆「東北40号」について

(1) 奨励品種に採用した理由

本県の大豆作は低収で褐斑等の障害粒が多く、品質が低下しており、多収、良質品種の要望が強い。

「東北40号」は多収で、粒質良く、褐斑をはじめ障害粒が極めて少ない特性を有することから